

令和6年度病虫害発生予報第5号の発表について

このことについて、次のとおり発表したので送付します。

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量	作物名	病虫害名	予想発生量
水 稲	葉いもち (普通期栽培)	並	露地 キュウリ	べと病	並
	穂いもち (早・短期栽培)	やや少		炭疽病	やや多
	(普通期栽培)	並		褐斑病	やや少
	紋枯病 (早・短期栽培)	やや多		うどんこ病	やや少
	(普通期栽培)	並		斑点細菌病	並
	もみ枯細菌病	並		モザイク病	やや少
	ごま葉枯病	並		ミナミキイロアザミウマ	やや少
	セジロウンカ	並		アザミウマ類	並
	トビイロウンカ	並		アブラムシ類	やや少
	ツマグロヨコバイ	やや多		ハダニ類	並
コブノメイガ (普通期栽培)	やや少	青ネギ	疫病	やや少	
斑点米カメムシ類	多		軟腐病	やや多	
			ネギハモグリバエ	並	
カンキツ	そうか病	やや多	アスパラ ガス	褐斑病	やや多
	黒点病	やや少		ネギアザミウマ	やや多
	ミカンハダニ	やや多		アブラムシ類	やや少
	ミカンサビダニ	並		ハダニ類	やや多
モ モ	ミカンハモグリガ	並	イチゴ (育苗床)	炭疽病	やや多
	せん孔細菌病	並		うどんこ病	並
	褐さび病	やや多		アブラムシ類	並
	ハダニ類	やや少	ハダニ類	やや多	
カ キ	モモハモグリガ	やや少	露地キク	白さび病	やや少
	ナシヒメシンクイ	やや多		アブラムシ類	やや少
	炭疽病	やや多		ハダニ類	やや多
	うどんこ病	やや少		アザミウマ類	やや多
ブドウ	カキノヘタムシガ	並	野菜・花 きの共通 害虫	シロイチモジヨトウ	やや多
	フジコナカイガラムシ	並		タバコガ類	並
果樹の 共通害虫	カメムシ類	多			

太文字の病虫害：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

* 予報根拠中の記号 (+)：発生量を多くする要因 (-)：発生量を少なくする要因 (±)：発生量が平年並になる要因

令和6年度 病虫害発生予報 第5号（8月）

A. 水稻の病虫害

1. 葉いもち（普通期栽培）

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は平年並であった。（±）
(2) B L A S T A M（いもち病発生予察システム）による7月の感染好適日の出現頻度は少なかった。（－）
(3) 8月の気象は気温が平年より高く（－）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 (1) いもち病対象の育苗箱施薬を行っていない圃場で発生を認めた場合や既発生圃場で病勢の進展を認めた場合は、早急に薬剤防除を行う。
(2) 育苗箱施薬を行っている圃場において、上位2葉への進展を認めた場合は早急に薬剤防除を行う。

2. 穂いもち

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 早・短期栽培： やや少
普通期栽培： 並

根 拠 (1) 7月上中旬の早・短期栽培での葉いもちの発生量はやや少なかった。（－）
(2) 8月の普通期栽培での葉いもちの発生量は平年並と予想される。（±）
(3) 8月の気象は気温が平年より高く（－）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 止葉に病斑を認めた場合は出穂期に必ず薬剤防除を行う。

3. 紋枯病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **早・短期栽培： やや多**
普通期栽培： 並

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は早・短期栽培では多く（＋）、普通期栽培では発生を認めなかった（－）。
(2) 8月の気象は気温が平年より高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 (1) 紋枯病対象の育苗箱施薬または本田防除を行っていない圃場では、適期（普通期栽培では出穂25～15日前など）に薬剤防除を行う。
(2) 発生が多い圃場では、出穂期頃までに確認防除を行う。

4. もみ枯細菌病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 普通期栽培では育苗期での発生は平年と同様に認めなかった。（±）
(2) 8月の気象は気温が平年より高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 出穂期が高温で降雨を伴うと多発するので、このような天候が予想される場合は、出穂期に穂いもち防除を兼ねて薬剤散布を徹底する。

5. ごま葉枯病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は早・短期栽培では多く(+)、普通期栽培では平年と同様に発生を認めなかった(±)。
(2) 8月の気象は気温が平年より高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

対 策 肥料切れにより多発しやすいため、穂肥を適切に施用する。

6. セジロウンカ

予 想 発生地域： 県内全域
発生時期： 並
発生量： 並

根 拠 (1) 県予察圃場での発生量はやや少なかった。(－)
(2) 7月下旬の発生量は早・短期栽培では多く(+)、普通期栽培では平年並(±)であった。
(3) 県予察灯での誘殺数は平年並であった。(±)

対 策 (1) 育苗箱施薬剤によっては、残効期間に違いがあるため、払い落とし調査を行い、幼虫が10株当たり300頭を超えている圃場では防除する。
(2) ヒメトビウンカの発生状況にも注意し、発生量に応じて本田での薬剤防除を行う。

7. トビイロウンカ

予 想 発生地域： 県内全域
発生時期： 並
発生量： 並

根 拠 (1) 県予察圃場では平年と同様に発生を認めなかった。(±)
(2) 7月下旬の発生は早・短期栽培および普通期栽培で平年と同様に認めなかった。(±)
(3) 県予察灯での誘殺は平年と同様に認めなかった。(±)
(4) 8月の気象は気温が平年より高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

対 策 8月中下旬に普通期栽培では50株調査して1株当たり2～5頭、短期栽培では25株調査して10頭以上の成・幼虫を認めた圃場は防除する。

8. ツマグロヨコバイ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 県予察圃場での発生量は多かった。(＋)
(2) 7月下旬の発生量は早・短期栽培ではやや少なく(－)、普通期栽培で多かった(＋)。
(3) 県予察灯での誘殺数は平年並みであった。(±)
(4) 8月の気象は気温が平年より高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

対 策 出穂期以降の密度増加によってすす症状の現れる圃場もあるため、本田での薬剤防除を行う。

9. コブノメイガ（普通期栽培）

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

根 拠 (1) 7月下旬の発生は早・短期栽培では認めず（－）、普通期栽培では平年よりやや少なかった（－）。

(2) 県予察灯での誘殺数は平年と同様に認めなかった。（±）

(3) 8月の気象は気温が平年より高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 (1) 周辺の圃場よりも葉色が濃かった圃場では産卵量が増える場合があるので注意する。

(2) 8月上旬の被害株率が20%以上の圃場では、若齢幼虫発生最盛期である8月5～25日頃に薬剤防除を行う。

10. 斑点米カメムシ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 多

根 拠 (1) 7月下旬の早・短期栽培での発生量は平年並（±）、7月上中旬の普通期栽培では少なかった（－）。ただし、大型カメムシについては、早・短期栽培、普通期栽培ともに畦畔が多かった。（＋）

(2) 県予察灯での誘殺数は多かった。（＋）

(3) 防除員報告では発生量の多い地区があった。（＋）

(4) 8月の気象は気温が平年より高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 (1) 出穂7～10日前までに畦畔等圃場周辺の除草を行う。また、休耕地はカメムシ類の繁殖場所になるので、耕起等によって雑草の少ない状態を保つ。

(2) 薬剤防除の時期は、液剤や粉剤等の場合は出穂期頃とその10～15日後である。また、粒剤の場合は7日程度早めて処理する。

(3) 防除効果を高めるために、地域一斉防除に努める。

B. 果樹の病害虫

－カンキツ－

1. そうか病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生量はやや少なかった。(－)

(2) 一般圃場での7月中旬の発生は認めなかったが、一部地域で発生がやや多かった。(＋)

(3) 防除員報告では発生の多い地区があった。(＋)

(4) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 発病した夏梢、葉、果実は早めに切除し、圃場外に持ち出すなど適切に処分する。

(2) 樹勢を健全に保ち、防風対策を行う。

2. 黒点病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生は認めなかった。(－)

(2) 一般圃場での7月中旬の発生は認めなかった。(－)

(3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 伝染源である枯枝は切除し、圃場外に持ち出すなど適切に処分する。

(2) 薬剤散布は、前回の散布から1か月以内または累積降水量250～300mmを目安に行う。

3. ミカンハダニ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 一般圃場での7月中旬の発生量はやや多かった。(＋)

(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 発生状況に注意し、1葉当たりの寄生雌虫数が0.5～1頭または寄生葉率が30～40%になれば薬剤防除を行う。

(2) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統薬剤の使用は年1回とする。

4. ミカンサビダニ

予 想 発生地域： 県内全域

発生時期： 並

発生量： 並

根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)

(2) 一般圃場での7月中旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)

(3) 8月の気象は気温が高い予報である。(＋)

対 策 過去に発生の多かった圃場では、8月上～中旬に薬剤防除を実施する。

5. ミカンハモグリガ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 一般圃場での7月中旬の発生量はやや少なかったが、一部地域で発生がやや多かった。(＋)

対 策 夏芽の発生が多い圃場では、新梢伸長期に防除する。

1. せん孔細菌病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 一般圃場での7月中旬の発生量は平年並であった。(±)
(3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 発病枝は伝染源となるので、見つけしだい除去し処分する。
(2) 病原菌は葉や果実の気孔、水孔等や傷口から侵入するので、風当たりが強い圃場では防風ネット等の防風対策を実施する。

2. 褐さび病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生量は多かった。(＋)
(2) 一般圃場での7月中旬の発生量はやや多かった。(＋)
(3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 枝の病斑が最大の伝染源であるので、見つけしだい枝を切り取り、圃場外に持ち出すなど適切に処分する。

3. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生は認めなかった。(－)
(2) 一般圃場での7月中旬の発生量はやや少なかった。(－)
(3) 降水量がほぼ平年並の予報である(±)。

- 対 策 (1) 発生の多い圃場では、収穫後の薬剤防除を徹底する。
(2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤の使用は年1回までとする。

4. モモハモグリガ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月の発生は認めなかった。(－)
(2) 県予察圃場フェロモントラップでの7月の誘殺は認めなかった。(－)
(3) 一般圃場での7月中旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)

- 対 策 (1) 周辺で多発している場合や発生の多い園地では、定期的な薬剤防除を心がけ、収穫後にも薬剤防除を徹底する。
(2) 交信攪乱剤を設置している園地においても、発生に注意し、発生が増加し始めたら追加防除を実施する。

5. ナシヒメシンクイ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の芯折れは少なかった。(－)
(2) 県予察圃場フェロモントラップでの7月の誘殺数は平年並であった。(±)

- (3) 一般圃場での7月中旬の芯折れの発生量は多かった。(＋)
(4) 防除員報告では発生のやや多い地区があった。(＋)
- 対 策 収穫後も薬剤防除を実施する。

1. 炭疽病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 一般圃場での7月中旬の発生量はやや多かった。(＋)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場内をよく観察して、発病果実や発病枝は見つけしだい除去し、圃場外に持ち出し適切に処分する。特に前年多発生した圃場では注意する。
(2) 薬剤防除はかけむらのないよう丁寧に散布する。
(3) 連続した降雨や台風があると発病が急激に進む場合があるので、これらの天候が予想される場合は予防的に薬剤防除を実施する。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. うどんこ病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少
- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 一般圃場での7月中旬の発生量はやや少なかった。(－)
(3) 8月の気象は気温が高い予報である(－)。
- 対 策 (1) 発生量が多くなると防除効果が劣るので早めに薬剤防除を実施する。
(2) 落葉した葉はできるだけ早く処分する。

3. カキノヘタムシガ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生時期： 並 (第2世代)
発生量： 並
- 根 拠 (1) 県予察圃場での第1世代成虫の発生は認めなかった。(－) 被害発生状況から第2世代の発生時期は平年並であると考えられる。(±)
(2) 県予察圃場での7月の発生量は平年並であった。(±)
(3) 一般圃場での7月中旬の発生は認めなかった。(－)
- 対 策 (1) 第1世代成虫最盛期の7～10日後までに防除していない圃場では、早急に薬剤防除を実施する。
(2) 防除を実施したにも関わらず、被害が続く場合には追加防除を実施する。

4. フジコナカイガラムシ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 一般圃場での7月中旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 8月の気象は気温が高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 発生が多い圃場では8月の防除を徹底する。
(2) 果実とヘタの隙間に生息しているので、薬剤散布は丁寧にやる。特に、スปีドスプレーヤー(SS)による防除では、かけむらができないように走行経路を見直すなど注意する。

ーブドゥー

1. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 一般圃場での7月中旬の発生量は平年並であったが、一部地域で発生量が多かった。(＋)

(2) 8月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 圃場の排水に努める。

(2) 発生が多い圃場では、収穫後の薬剤防除を徹底する。

(3) 薬剤防除は降雨の前後に重点をおく。

ー果樹の共通害虫ー

1. カメムシ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **多**

(令和6年5月1日付け注意報第1号発表)

(令和6年5月30日付け調査速報第1号発表)

(令和6年5月30日付け技術資料第2号発表)

(令和6年7月17日付け技術資料第5号発表)

根 拠 (1) 県予察圃場予察灯の7月の誘殺数は多かった。(＋)

(2) 7月の綾歌郡綾川町の予察灯の誘殺数は多かった。(＋)

(3) カキの一般圃場での7月中旬の発生は多かった。(＋)

対 策 (1) 有袋栽培では、できるだけ早く袋かけを行う。

(2) 施設栽培の場合は、開放口をネット(4mm目合い)で覆うとカメムシ類の侵入防止対策となる。

(3) 圃場内をよく観察し、被害果実やカメムシ類の発生が見られる場合は、早急に防除を実施する。特にスギ、ヒノキ等が周辺に多い圃場や、過去に被害が認められた圃場では注意する。

(4) 多発してからの防除は効果が劣る場合があるので、発生初期の防除を徹底する。

(5) 成虫は夕方に飛来し夜間加害するので、薬剤散布は夕方に広域かつ一斉に行うと効果的である。

(6) 黄色蛍光灯は、チャバネアオカメムシには忌避効果があるが、ほかのカメムシ類には効果がないので注意する。

(7) 防除薬剤は、主要農作物病虫害雑草防除指針、香川県監修の果樹病虫害防除暦を参考にする。

C. 野菜、花きの病害虫

一露地キュウリー

1. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 7月下旬の発生量はやや多かった。(+)
(2) 8月の気象は気温が高く(－)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、肥料切れに注意し、樹勢が衰えないように栽培管理する。
(2) 耐病性品種を用いる。
(3) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(4) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。
(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 炭疽病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は平年並であったが、一部地域で発生量がやや多かった。(+)
(2) 防除員報告では発生量がやや多い地区があった。(+)
(3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐ。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. 褐斑病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

根 拠 (1) 7月下旬の発生は認めなかった。(－)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 耐病性品種を用いる。
(3) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(4) 薬剤散布は予防的に行い、初期感染を防ぐ。
(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. うどんこ病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

根 拠 (1) 7月下旬の発生は認めなかった。(－)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 耐病性品種を用いる。
(3) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、初発時期の葉を除去し、通風を図

- る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
- (4) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。
 - (5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. 斑点細菌病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 7月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに過繁茂にならないよう栽培管理する。
(2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 薬剤防除は予防的に行う。曇雨天が続くような場合に発病を認めたら適宜防除する。

6. モザイク病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は少なかった。(－)
(2) 7月下旬のアブラムシ類の発生量は平年並であった。(±)
(3) 黄色水盤での7月のアブラムシ類の誘殺数はやや少なかった。(－)

対 策 (1) アブラムシ類の防除を行う。
(2) 発病株は、早期に抜き取り圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 収穫用具の消毒をする。

7. ミナミキイロアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

根 拠 (1) 7月下旬の発生は認めなかった。(－)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 青色粘着トラップ等を利用して発生状況を確認し、発生が多い圃場では防除を行う。
(2) シルバーマルチを敷設する。
(3) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(4) 本虫が媒介する黄化えそ病の発生地域では、本虫を対象に定植時に必ず粒剤または灌注処理し、定期的に薬剤防除を実施する。発病株を認めたら早急に地上部を除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(5) 施設栽培からの飛び出しを防ぐため、発生を確認した施設では、栽培終了後、施設を密閉して死滅させる。
(6) 防除後も表土中の蛹や葉肉内の卵が新たに羽化、孵化する場合もあるので、多発圃場では7～10日間隔で防除を行う。
(7) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

8. アザミウマ類（ネギアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ）

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 青色粘着トラップ等を利用して発生状況を確認し、発生が多い圃場では防

除を行う。

- (2) シルバーマルチを敷設する。
- (3) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (4) 防除後も表土中の蛹や葉肉内の卵が新たに羽化、孵化する場合もあるので、多発圃場では7～10日間隔で防除を行う。
- (5) 抵抗性発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

9. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 黄色水盤での7月のアブラムシ類の誘殺数はやや少なかった。(－)
(3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。
(3) 8月中旬から有翅虫の飛来が増加する場合があるので、病害虫防除所ホームページに掲載している黄色水盤トラップによる誘殺数を参考にして適期防除に努める。

10. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 刈り取った茎葉は圃場から持ち出し、処分する。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－青ネギー

1. 疫病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生は認めなかった。(－)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
(2) 発生の多い圃場では、菌密度が高くなっているため、圃場をかえるか土壌消毒を実施する。
(3) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。

2. 軟腐病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 8月の気象は気温が高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理する。
(2) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
(3) 発生の多い圃場では、菌密度が高くなっているため、圃場をかえるか土壌消毒を実施する。

(4) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。

3. ネギハモグリバエ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 7月下旬の発生は認めなかった。(－)
(2) 8月の気象は気温が高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 育苗床では防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。
(2) 摘葉した残さや、収穫終了後の茎葉は次作の発生源になるので、土中に埋めるか、古ビニール等で被覆するなど、適正に処分する。
(3) 多発してからの防除は困難であるので、発生の兆しが見られたら早めに防除する。
(4) 定植時には育苗トレイ灌注または粒剤施用をする。

4. ネギアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 7月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) ネギアザミウマの食害痕から病原菌が侵入する可能性があるため、葉に食害が認められる場合は早期に防除を行う。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－アスパラガス－

1. 褐斑病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 7月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 過繁茂にならないよう、茎葉の刈込みや適切な肥培管理を行う。
(2) 刈り取った被害茎葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。

2. ネギアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 7月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 施設の開口部を防虫ネットで被覆したり、光反射資材を施設周縁部に敷設したりするなどして、侵入防止対策を講じる。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 圃場内の数か所で成茎の擬葉が繁茂しているところを手で払って、10×20cm程の板上に1か所当たり1～5頭の成虫を認めたら防除する。
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない

3. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 黄色水盤での7月のアブラムシ類の誘殺数はやや少なかった。(－)
(3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 施設の開口部を防虫ネットで被覆したり、光反射資材を施設周縁部に敷設するなどして、侵入防止対策を講じる。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。
(4) 8月中旬から有翅虫の飛来が増加する場合がありますので、病虫害防除所ホームページに掲載している黄色水盤トラップによる誘殺数を参考にして適期防除に努める。

4. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 7月下旬の発生量はやや多かった。(＋)

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 刈り取った茎葉は圃場から持ち出し、処分する。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－イチゴ（育苗床）－

1. 炭疽病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 7月下旬の育苗床での発生量は平年並であったが、一部の地域で発生量がやや多かった。(＋)
(2) 8月の気象は気温が高い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 発病葉やランナーは可能な限り除去するとともに除去した発病葉、ランナーは伝染源となるので適正に処分する。
(2) 水滴の飛散等で伝染するので、発病が見られる圃場では、灌水の跳ね返りがないように注意する。
(3) ランナーの切り離し前までの防除を徹底し、育苗中に伝染環を断つ。
(4) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。
(5) Q o I 剤に対して感受性の低い菌株が確認されているので注意する。

2. うどんこ病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 7月下旬の育苗床での発生量は平年並であった。(±)

- 対 策 (1) ランナーの切り離し前までの防除を徹底し、育苗床で発病を減らすよう努める。
(2) 発生圃場では、7日より短い間隔で薬剤防除を行う。
(3) 収穫を終了した圃場（本圃）の株は直ちに処分するとともに、子苗（ランナー）を切り離した後、親株は早期に除去し処分する。
(4) 窒素肥料の過多や葉が混み合ったりすると多発しやすくなるので、適切な栽培管理を行う。
(5) 耐性菌の発生を回避するため、同一系統の薬剤を連用しない。散布回数が

多くなることから、各薬剤の使用回数及び収穫前日数を遵守する。

3. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量はやや多かった。(+)
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での7月のアブラムシ類の誘殺数は、やや少なかった。(－)
(3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 育苗床は防虫ネットで被覆し、アブラムシ類の飛び込みを防止する。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。
(4) 8月中旬から有翅虫の飛来が増加する場合がありますので、病虫害防除所ホームページに掲載している黄色水盤トラップによる誘殺数を参考にして適期防除に努める。

4. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 7月下旬の発生量は平年並であったが、一部の地域で発生量がやや多かった。(＋)

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 親株床での防除を徹底し、育苗床での防除回数を減らすよう努める。
(3) 育苗床（苗の親株からの切除後）では発生をこまめに観察し、早めに防除を実施する。散布にあたっては、使用回数に留意する。

－露地キク－

1. 白さび病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は小ギクで平年並（±）、輪ギクで発生を認めなかった（－）。
(2) 8月の気象は気温が高く（－）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

- 対 策 (1) 窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理をする。
(2) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で実施し、曇雨天が続くような場合には防除間隔を短縮する。発生が多い場合には治療効果のある薬剤を散布する。
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生は小ギク、輪ギクともに平年と同様に認めなかった。（±）
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での7月のアブラムシ類の誘殺数は、やや少なかった。（－）
(3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。（±）

- 対 策 (1) 今後作付けを行う場合は、光反射資材や防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

- (3) 育苗期から生育初期に粒剤等を施用する。
- (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (5) 8月中旬から有翅虫の飛来が増加する場合があるので、病害虫防除所ホームページに掲載している黄色水盤トラップによる誘殺数を参考にして適期防除に努める。

3. ハダニ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は、小ギクではやや多く(+)、輪ギクでは多かった(+)。
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 人による持ち込みを回避するため、発生圃場に入った着衣のまま未発生圃場に立ち入らない。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 発生が局所的な場合には、スポット散布を行う。
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. アザミウマ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は小ギクではやや多く(+)、輪ギクでは平年並(±)であった。
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) アザミウマの吸汁により、ウイルス病が媒介される場合や食害痕から病原菌が侵入する場合があるので、食害が認められる場合は早期に防除を行う。
(2) 防除後も表土中の蛹や葉肉内の卵が新たに羽化、孵化する場合もあるので、多発圃場では7～10日間隔で防除を行う。
(3) シルバーマルチ等を被覆することで飛び込み量を減らすことができる。
(4) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(5) 抵抗性発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

ー野菜・花きの共通害虫ー

1. シロイチモジヨトウ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 7月下旬のネギでの発生量は平年並であった。(±)
(2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの誘殺数は、平年並であった。(±)
(3) 8月の気象は気温が高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 中老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、体長1cm以下の若齢幼虫期に薬剤防除を行う。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. タバコガ類 (タバコガ、オオタバコガ)

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量はキュウリでは平年並(±)、小ギクでは認めず(ー)、

輪ギクではやや少なかった（－）。

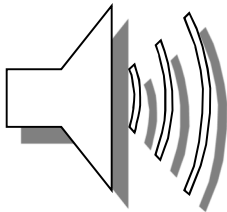
- (2) 防除員報告では、丸亀市飯山町のフェロモントラップでのオオタバコガの誘殺数はやや多かった。（＋）
- (3) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの誘殺数は、タバコガでやや少なく（－）、オオタバコガで平年並であった（±）。
- (4) 8月の気象は気温が高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

- 対 策
- (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 - (2) 花蕾や生長点を食害するので、被害が見られたら直ちに薬剤防除を行う。
 - (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病害虫防除所インターネットホームページ

URL: <http://www.jppn.ne.jp/kagawa/>



6月～8月は、農薬危害防止運動期間です。

農薬の使用が増える時期ですので、今一度、農薬を適正に使用できているか、チェックしましょう。